

菅浦
―湖と生きる村を訪ねて―

吉村
俊昭

Name :

YOSHIMURA Toshiaki

Title :

Sugaura: A Visit to a Village Where Life is Closely Interwoven with Lake Biwa

Summary :

Lake Biwa encompasses one sixth of the area of Shiga Prefecture and has played a vital part in the lives of people of Shiga since ancient times. Lake Biwa is well known as an important tourism resource. However, the people who live by the lake and depend on it for their livelihoods are given little mention. Okubiwako, the northernmost area of Lake Biwa, is a breathtakingly beautiful area, with a very long, very rich culture but public transportation to the area is limited and access is inconvenient, making it even more remote. In this paper I will present a survey of Sugaura, a village in Okubiwako. This village, which was mentioned in poems of Man'yōshū centuries ago, has its own unique customs and culture that have been preserved to the present. In this survey I examine the lifestyle of the people of Sugaura, whose existence is intricately interwoven with Lake Biwa, examining the period of the recent past to the present day.

一、はじめに

滋賀県の六分の一を占める日本最大の湖である琵琶湖は、最も狭い部分に架かる琵琶湖大橋を境に「南湖」と「北湖」に分かれる。水深も浅く対岸まで三キロ余りの南湖は六七〇平方キロメートルある琵琶湖のわずか八パーセントほどである。北湖は「ウミ」と呼ぶにふさわしく広大で琵琶湖の大半を占めるが、湖の東、西、北で湖岸の様相は大きく変わる。明治時代以降に大規模な干拓や護岸などで湖岸は人の手が加わり、東岸、南岸にみられる人工湖岸は湖岸の三七パーセントにのぼる。それに比べ北部の湖岸は、山が湖にせり出す山地湖岸が大半で、全湖岸線のうちの十七パーセント、四十キロメートル余りある山地湖岸の大半を占めている（滋賀県『琵琶湖ハンドブック』「湖岸」）。滋賀県の南部、東部に比べ平地は少なく、気候的には北陸、日本海気候であり今では辺鄙な地域の印象がぬぐえないが、明治初期までは若狭と京都、大阪を結ぶ琵琶湖水運の要で「塩津」「大浦」「菅浦」といった港があり、湖北の人々が重要な水運を担ってきた。

リゾート地として湖岸が開発されてきた大津、草津、彦根、

吉村 俊昭



長浜などといった湖南、湖東からみる琵琶湖は葭原、湖越しに湖西の山々を望む穏やかで優しい風景を連想するが、湖西の高島市北部の海津（高島市マキノ町）に至ると湖岸の様相が一変する。海津から高月町片山（長浜市）に至る琵琶湖最北部の奥琵琶湖と呼ばれる地域は、平野部が少なく山から一気に琵琶湖に落ち込む、まるでフィヨルドのような地形である。その奥琵琶湖の中ほどあたり、湖に突き出た葛籠尾崎の西側部分に菅浦（長浜市西浅井町）という集落がある。万葉集にも詠われ中世の古文書「菅浦文書」で知られる菅浦である。最近では平成二十八年に、重要な文化的景観として「菅浦の湖岸集落景観」が

選定されたところだ。湖上交通がさびれて一時は陸の孤島といわれた僻村であるが、かつては琵琶湖とともに生き、水運の担い手としてまた漁民として暮らしてきた。そこで、今日の「菅浦」の人々の暮らしぶりが知りたく話を伺いに訪れた。

二、大浦から菅浦の景観

湖西の北の端、桜で有名な海津から湖岸に沿って進むと大浦（長浜市西浅井町）を経て菅浦に至る。奥琵琶湖の景観を楽しめるルートだ。海津から大崎寺（高島市マキノ町海津）、海津大崎を経て大浦に至る桜並木の美しい湖岸沿いの道があるが、遠回りして追坂峠からJR永原駅、大浦に至る道を行く。大浦の町はずれ大浦漁港から先が菅浦である。大きく入り込んだ琵琶湖は、静かな湖面に山容を映して琵琶湖の雰囲気からは程遠い印象である。大浦と菅浦の境界から十九キロ弱が菅浦の観光産業に大きな影響を与えた奥琵琶湖パークウェイとなる。赤崎を回り込むと奥出湾が見える。以前は赤崎から湾を挟んで対岸の突き出したジャガ（蛇賀）との間には「こわたし」という渡しがあった。左手谷筋に沿って開けた田んぼがある。中世に大浦と土地を争った「諸河」という農地である。「奥手浜」にも同じく騒動のもととなった「日指」の農地があり、今では農地改良で整った田んぼが谷いっぱいに広がっている。避難港として使われている池の口を過ぎるとほどなく湖の視界が開け、琵琶

湖らしい景色が戻ってくる。「竹生島」が見えてくれば菅浦の集落は近い。

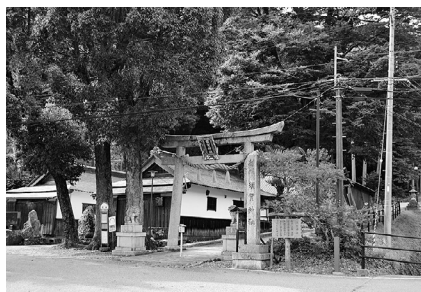
陸の孤島とは思えない観光地らしいレストランと国民宿舎「つづらお」が現れる。ここで奥琵琶湖パークウェイと別れ、菅浦の人々に副収入をもたらした「ヤンマー家庭工場」の一つを過ぎるとすぐに「須賀神社」の大きいようが目にとまる。菅浦の集落である。湖岸横の駐車場は老人会の方々が清掃にあたっておられた。須賀神社参道横の御供所の左に、葭葺の「西の四足門」がある。遠く湾の向こう集落の右端には「東の四足門」が見える。この東西の門に挟まれた集落が菅浦の村である。集落の中ほどに景観に似合わないコンクリートで囲まれた船溜まりがある。昭和五四年（一九七九）に滋賀県の「新沿岸漁業構造改善事業」で築港された船溜まりは、菅浦の景観の一つであった東西の「舟入」の埋め立てにつながったという。その手前に猫の額ほどの砂利浜があり、三メートルほどの長さの橋板が三ヶ所湖に突き出ている。地元では「ウマ」と呼び、水汲みや洗い場などとして利用されているそうだ。小さな二人の子供とその祖父らしき人物が水遊びに興じていた。母親らしき女性が「ウマ」に腰かけて見守っている。日常生活が垣間見られる光景である。



台風時などで避難港として使われている「池の口」



菅浦の集落 山と湖の狭間に民家が立ち並ぶ



「須賀神社」鳥居と御供所、その奥に神輿堂がある



菅浦文書に登場する奥出湾に面した「日指」の農地

三、菅浦の集落と聞き取り

まず、「須賀神社」に参拝する。昭和二七年（一九五二）の付け替えて一気に琵琶湖に下る小出川沿いに参道が伸びる。きれいに整備された石畳が終わるところに手水舎があり、苔むした水石の階段が拝殿に向かっていている。参拝の氏子はこれより裸足になる。神への敬虔さの顕れである。また、菅浦では船には濡れた床で滑らないよう裸足で乗っていた。菅浦では船は重要な交通手段であり、その生活習慣から船形古墳（淳仁天皇御陵と伝わる）のある神社全体を船に見立てて裸足になったとも聞く。一般参拝者もスリッパに履き替えるとの張り紙があり、貸し出しのスリッパをお借りする。

須賀神社は、明治三九年（一九〇六）の「神社合祀令」に基づき、明治四二年（一九〇九）に元々あった「小林神社」、「赤崎神社」、「保良神社」の三社を合祀したもので、「本殿覆屋」内に向かって右側の東殿に淳仁天皇を祭神とする保良神社、左側の西殿に小林神社と赤崎神社を祀っている。平成二五年に千二百五十年祭が行われ、境内はきれいに整備されている。菅浦の人々と須賀神社の強いつながりを感じながら参拝を終え、参道途中の「菅浦郷土史料館」に向かった。

郷土史料館は、菅浦の方々により運営され日曜日のみ開館している。事前に連絡しておいたので平日にもかかわらず開館いただいた。一室には須賀神社関連の棟札、絵馬、中世の惣に関

わる資料などが展示され、奥の一室には民具が展示されている。今年の運営を担当されている藤井泉三氏に案内いただき、合わせて菅浦の昭和、平成の生活について伺った。話の後で、菅浦の歴史については阿弥陀寺住職秋山富男氏を勧められ、日を改めて秋山住職より話を伺うことにする。

藤井氏から菅浦の人口が減少し高齢化していると伺っていた。七月、昼時の暑い時間帯であったとはいえ集落には人影が見えず静まっている。集落西端の道祖神から景観を代表する「波除石垣」に沿って集落の中ほどを「東の舟入」跡に向かう。昔ながらの風情の残る民家の中には、新しく立て替えられた今日風の民家やプレハブのヤンマー家庭工場が存在する。もし潮の香りが加われば、琵琶湖岸の集落というよりも日本海に面したうつくしい漁村の印象である。「阿弥陀寺」までは三百メートルほど、立派な穴太積みの石垣の上に大きな枝垂れ桜があり本堂が建っている。さらに道沿いに二百メートルほどで東の舟入に着く。東の四足門までは湖岸沿いにさらに三百メートルほど先になる。ここで折り返し湖岸横の浜通りと呼ばれる道を通って西の四足門に戻った。

改めて菅浦を訪れ秋山住職に話を伺う。まず、割烹旅館佐吉を営んでいられる岩佐達己氏を訪れ菅浦の食文化について話を伺うことにしていたが、当方の連絡不手際で訪問時間が重なってしまいご住職に迷惑をかけたが、二時間余りにわたって菅浦の歴史と人々の生活について丁寧なお話をいただいた。佐吉の



「西の四足門」、集落の境を示す。



「須賀神社」、ミズイシの敷かれた階段。正面は拝殿



東の境には同様の「東の四足門」がある (写真: 寿福滋)



「菅浦郷土資料館」、通常は日曜日のみ開館

岩佐氏については後日、「琵琶湖と食文化」「菅のまつり」について、これも二時間余りお話をいただく機会を得た。

菅浦郷土史料館の藤井泉三氏、阿弥陀寺住職秋山富男氏、割烹旅館佐吉の岩佐達己氏、各氏のお話は、菅浦の千数百年間という歴史時間に凝縮され、内容豊かで多岐にわたった。

四、菅浦の今昔

菅浦は百二十軒余りの民家があるが、生活しているのは五十数軒で百二十名ほどである。村内に産業となるものが少なく、菅浦を離れて勤務している人が多い。また利便性を考えて菅浦に家がありながら、町の近くに別に家を建てていると聞く。そのため、菅浦の集落としては高齢化が著しいという。住民の足であるバス路線も一日に三本しかなく、過去には船が頼りであった菅浦であるが、今では自家用車が重要な交通手段になっている。昨年までは小さいながらも商店があったが、若い人たちが村外で日用品を購入して帰るので、村内では商売がなりゆかなくなった。今は、週に一回移動販売車が来るものの年配者には生活がしにくい状況になっているようだ。通りからは子供たちの声がしない菅浦だが、保育園児一名、幼稚園児一名がいるとのことである。漁業専従者は二、三名で五、六人がサラリーマンとの兼業で従事している。一九六〇年代から続くヤンマー家庭工場は今も十カ所ほどが稼働している。

菅浦の農業

現在、村内の畑地は極端に少ない。藤井氏の話では、今の景観からは想像できないが、村の収入源であった薪や、灯火用や油紙塗料の油をとる油桐あぶらぎりに代わって、船で輸送できる利便性から湖北の養蚕農家への出荷用の桑の栽培が盛んになり、明治後期から昭和前期まで集落の周囲は桑畑が広がっていたという。

村での養蚕は産業となるほどでもなく家庭で使う程度であった。稲作は、中世から始まった隣村の大浦との土地争いでわかるように、平地のない菅浦は田んぼの確保に腐心してきた。稲作は奥出湾の日指・諸河の地で行われているが、昭和前期までは、稲を干すのに奥出湾の内側は風通しの悪さがあり、稲の運搬に舟を利用していたことから、日当たりの良い集落前の狭い礫浜にハサ杭を立てて稲干しをしていた。農業においても琵琶湖の存在が大きく関わってきたという。ハサ杭に使う栗の木とハサ竹も重要な商品であった。またハサ竹用の真竹は竹細工や剣道の防具の胴や竹刀としても商品化されていた。それも近年は利用されずに竹藪は荒れているという。南向きに湖に面して湖北の中でも暖かいことから、ミカン、ビワなど果樹の栽培も行われてきたが、近年はイノシシ、サル、シカなどによる被害がひどいらしい。

菅浦の漁業

明治時代までは魚を取っても商売としては成り立ちにくく、

漁師はまずしい暮らしを余儀なくしていた。漁業が商売となるのは大正時代になってからで、昭和に入り道路が開通してからは商品の「稚アユ」輸送のトラックが水替えをしながら輸送したという。その頃は毎年十月になると、遡上できないまま死んでいくアユで浜が黒くなったらしい。

昭和後期高度成長期に琵琶湖の水質が悪化した。いくらか改善されて琵琶湖の中でも奥琵琶湖は、窒素やリンの値は低く透明度も高いといえるが（滋賀県『琵琶湖ハンドブック』『水質の変化』）、過去の水質を知っている藤井氏に言わせれば飲み水にも使えた昔の水質からは程遠いという。水質の変化に合わせてたように琵琶湖での漁獲量が二〇〇二年統計では五十年間で五分の一まで減少し（前掲『漁業』）、輸入魚の増加、食生活の変化による魚離れなどと相まって、滋賀県の漁業従事者もここ五十年ほどで四分の一にまで減少した（滋賀県『琵琶湖と暮らし二〇一五』）。菅浦の漁師も大幅に減ったという。



東西にあった東の「船溜まり(舟入り)」跡

奥琵琶湖の魚

琵琶湖北湖の中でも水がきれいで七〇メートルもの水深のある竹生島周辺は好漁場である。

昼前に船溜まりから船が出ていった。沖合の作業を終え戻ってきたので何がとれたか聞いてみると、「アミエビ」とそつけない返事であった。小さな船倉にはコエビが泳いでいた。沖の生簀^{いけす}から持ち帰った「スジエビ」である。スジエビをアミエビと呼ぶのか。「エビ豆」やかき揚げの味を思い出した。

割烹旅館佐吉で淡海の宝石といわれる「ピワマス」の刺身、焼き物、味噌汁などいただいた。くせがなく脂ののった甘みのある味は、絶品といえる旨さであった。琵琶湖固有種で体長は



「菅浦漁港」。新しく作られた船溜まり



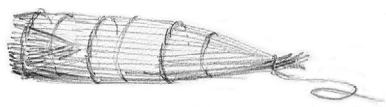
集落の西側に立つ「ヤンマー家庭工場」。集落内のものはもっと小規模である

四、五〇センチになるという。湖西では「アメノイオ」と呼ぶが、菅浦では「マス」と呼んでいる。漁は六月から九月にかけて刺網か一本釣りトロールで行われているとのこと。米原市さあが醒井養鱒場（米原市上丹生）で養殖も行われているが、まだまだ流通量は少ないと聞く。

店の生簀に十匹を超す「イワトコナマズ」と在来種の「コイ」が活けられていた。在来の天然コイは少ないとのこと。イワトコナマズはナマズよりスリムでグレーがかかった体にまだら模様がある。体長は三、四十センチ。澄んだ水の水深のある岩盤の場所を好むという。漁法は刺網や一本釣りが主で、五、六月には産卵のためアシ原の浅瀬にアがつてくると聞く。刺身やかば焼が旨いらしいが食す機会はなかった。

モンドリやタツベなどの漁具を用いてたくさんとれていた、「ギギ」や「テナガエビ」は取れなくなったという。特にギギはここ十年ほど見かけていないとのことであった。よく知られる「ワカサギ」は琵琶湖の在来種ではなく菅浦では漁を行っていない。

今年は「アユ」が不漁らしい。天候のせいで琵琶湖低層部の水の循環が悪く酸素不足になっているとのことである。水質改善、アシ原の再生や水産資源回復の放流が盛んに行われているが、人の力は小さく自然の影響力が一番大きいと感じさせられた。



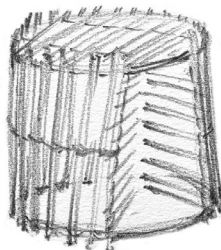
「モンドリ」。浅瀬に仕掛けられる竹製の漁具



「スジエビ」の漁を終えて戻った漁船



割烹旅館佐吉の生簀の魚。「イワトコナマズとコイ」



「タツベ」。浅瀬に仕掛けられる竹製の漁具

琵琶湖と観光

昭和四十六年（一九七二）に菅浦の山腹を横切り月出に至る展望を売りにした「奥琵琶湖パークウェイ」が開通した。これがきっかけで観光客が多く訪れるようになり、「民宿」が四軒も開業したという。それも次第に観光客は減少し、最後に残った民宿も宿泊をやめて仕出しのみ営業されているという。

現在菅浦で宿泊できるのは四代続く割烹旅館佐吉だけとなっている。客層は「集落景観の観光」と「琵琶湖の魚料理」や「鴨料理」を目当てに来ているとのこと。鴨は琵琶湖の冬の特産物であり独特の「モチ網猟」が知られていたが、昭和三十九年（一九六四）琵琶湖の鴨猟が全面禁止になり、琵琶湖産天然鴨はない。しかしながら昭和五十七年から奥出浜で「マガモの養殖」が行われ、年間四千羽ほど出荷されている。佐吉の鴨はこれを使っているとのことである。現在ではパークウェイによる観光のにぎわいは影を潜め、落ち着いた琵琶湖畔の漁村のたたずまいの集落を散策して歴史文化に思いを巡らせ、琵琶湖の授かりものを食す観光地に変貌したと思える。

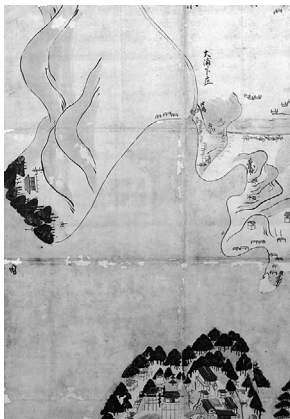
民宿に遅れて昭和五〇年（一九七五）「国民宿舎つづらお荘」が開業した。国民宿舎ブームにあやかつての開業であったがブームも去り十年余りで閉鎖された。その後、地元の要望で有限会社として再出発して「国民宿舎つづらお」として今に至っている。菅浦は竹生島へのロープウェイ建設など思いもよらない観光開発が考えられたが、村民は景観を守ってきた。環境問

題評論家の富山和子氏とみやま かつこは『水の文化史』で「湖北の菅浦は、一度訪れたら決して忘れられないほどにみやびやかな漁村であった。」と記している。琵琶湖の重要な文化的景観に指定され新たな観光資源が加わったこと、ボランティアの方々による集落の案内、解説がされるようになったことで訪れる人も増えるのではないだろうか。

竹生島と菅浦

琵琶湖の孤島といった趣の「竹生島（長浜市早崎町）」であるが、菅浦から四キロメートルほど、葛籠尾崎からは直線二キロメートルしかない。現在、竹生島を訪れるには西側の今津港（高島市今津町今津）または東側の長浜港（長浜市港町）から乗船するが、昭和初期には琵琶湖汽船の前身である太湖汽船が天津から湖西を経て海津、大浦、菅浦、竹生島、長浜といった航路で運航されていた。そのころまで菅浦は竹生島の一歩最寄りの港であった（長浜市教育委員会「菅浦の湖岸集落景観保存活用計画報告書」）。

竹生島は奈良時代に行基上人



14～15世紀のものだとされる「菅浦絵図（部分）」。図中の島は「竹生島」

により開基されたと伝えられる信仰の島であるが、菅浦とのつながりは戦国時代にはすでにみえる。江戸時代中期に編纂された『近江輿地志略』^{（おうみよちしりやく）}には、巻の八十七浅井郡第四菅浦村で竹生島が詳細にとりあげられ、葛籠尾へ十八町の距離にあると記されている。また菅浦には阿弥陀寺を含め四カ寺四坊一庵の名が記され、

そのうち四坊は竹生島の寺院末寺となっている（大正時代にはすでに四坊はなくなっている）。現在の竹生島は琵琶湖東岸の奥琵琶湖スポーツの森と同じ行政区域になっているが、過去には所領、廻船、宗教などさまざまな形で菅浦と強い繋がりがあったことがうかがわれる。

石垣のある景観

菅浦の景観として石垣がある。その一つに村を琵琶湖の波から守る「波除石垣」^{（なよけしがき）}がある。波除といってもたかが湖の波と思うが、藤井氏によると台風の時ほど軽々と石垣を超え家の中まで水が入ってきたことがあったという。今では、船溜まりの堤防



菅浦から見える「竹生島」。よくみる竹生島の写真の裏側（北側）になる



湖に面した強固な石垣。「物置（モノオキ）」と呼ばれている



民家の前に作られた「波除石垣」。垂直に積み重ねられている

ができたおかげでそのようなことはないらしい。浜に面して民家との間に「物置」と呼ぶ大石を使った石垣群がある。現在は、小さな畑地になっていたり納屋が建っているが、これが波除として一番重要な石垣であった。二メートルほどの厚みがあり頑丈な作りである。集落の道に沿って民家を囲むように小さめの石を積んだ石垣がある。高さは高いものでも一メートルほどで物置に比べて厚みはない。物置を越えた波をさらに防ぐために積み上げられたものだ。一部通路幅に切り込みがあり、非常時のみ「波止め板」を差し込んで波を防いでいたという。他に菅浦の石垣には、狭小な土地を利用するため「盛り土の石垣」がある。阿弥陀寺の石垣は特に立派だが、高台の社寺や民家に見

ることができ
る。また、山からすぐ湖につながる菅浦では、集落の中の山と湖を結ぶ南北の道は水が出ると川に変わる。整備された現在では見分けにくい
が、波除とは別に川の水を防ぐ石垣も見られる。



「阿弥陀寺」の穴太積み
の石垣。特に立派な「盛土の石垣」である



「波除石垣」。出入り口に開口部があり板が差し込まれるようになっている



旧小出川沿いの「越流防止の石垣」



湧水を利用するために作られた「イド」



浜に作られた「ウマ」。昭和36年に水道ができるまで日常的に使用されていた

水の習俗

現在は、須賀神社の脇に上水道の水源があり全戸に水道がひかれている。昭和の中頃までは、谷水や湧水と琵琶湖の水を飲用に使っていた。湧水場所や水路沿いに設けられた「イド」と呼ぶ場所では、仏事用、飲用、洗い物用など「上の水」、「下の水」として厳密に区別され、琵琶湖の水利用も同様に使用する浜の場所が決められていたという。秋山住職によれば、昭和の戦時中に疎開してきた人がこのような水の使い分けを知らずに騒動になったこともあったらしい。琵琶湖での水汲みや洗い物には「ウマ」が利用された。現在も船溜まり西側の浜にウマを見ることができ
るが、な
が
ら
く
使
用
し
て
い
な
か
つ
た
も
の
を
近
年

復活させたという。

菅浦においての水利用は資源を有効に利用する生活様式として成り立ってきたといえる。水道がひかれて生活様式が大きく変わったが、著しく水利用が変化したのは奥琵琶湖パークウェイと砂防ダムなどの治水事業によるところが大きいという。これまでの水の流れに人の手が加わったため谷水、湧水の枯渇や減少が起こったのである。また、琵琶湖の水も水質が悪化して飲用ができなくなった。佐吉の生簀は井戸水を汲みあげているが、雨の日は濁るときく。

菅浦の祭り

永く祭りの伝統が残ってきた菅浦であるが、明治時代に三社が須賀神社として合祀された時は、三社の氏子や菅浦を分けてきた西村、東村のしきたりなど様々に難しい課題があったという。祭りなど集落の年中行事は、「氏子総代」三人と「神主組」と呼ぶ西、東組の九名が一年交代の当番制で執り行われている。また当年の神主組は、元、中、末に分かれ四か月ごとに交代する。大正時代までは、本役である神主組は、経済的に余裕のある金持ちの中から選ばれていたそう、この役になりたいと皆頑張ったという。

例年、四月第一土曜日、日曜日に行われる「昔のまつり」は、五穀豊穡と人々の安全祈願として行われているが、そこには独特な慣わしを見ることができる。「幣祭（ヘマツリ）」と呼ばれ、

地を掃く「幣回し」や「幣倒し（ヘタオシ）」などの所作がある。神輿の担ぎ手は、「アシナカ」という草履をはく。担いで走るため踵を地に付けないから草履の後ろは不要ということである。アシナカ（足半）は、鎌倉時代の絵巻などに見える軽便な草履として下級の者がはいていたものと同じものと考えていいだろう。

八王子（小林神社）、赤崎、明神（保良神社）の三社の神輿が担がれるが、神輿堂から最初に取り出した神輿のみが、集落の東端となる東の四足門御旅所まで担がれて回る。これをムラマワリと呼ぶ。残りの二基の神輿は集落の中心まで担がれる。このとき神輿が通る道筋には三、四〇センチ間隔で浜の砂利が盛り塩のように積まれる。清めの意味があるという。岩佐氏によれば、浜の砂利は琵琶湖の水で洗われ清められているという考えがあるのだという。



祭りの「ムラマワリ」の神輿。(画像提供・長浜市)

年越祭とトシノミ

「トシノミ」とは、オタメ、オウツリなどとも呼ばれ、多くは贈答に対して返礼の品物を指す。あるいは、年の初めに神社から稲穂をいただく農耕儀礼としての「トシノミ」がある。よく似た正月の風習に、歳神様からの配りものとして紙に包んだ米や、餅などをいただくトシダマがある（柳田國男「トビの餅・トビの米」）。

菅浦の「トシノミ」も、年を越すための重要な神社からの配り物で独特の形で年越しと正月の行事となっている。人々は大晦日の「年越祭」に須賀神社に参拝し「トシノミ」をいただく。大晦日に正月の配りものをいただくというのは、私たちからす



「幣倒し（ヘタオシ）」の所作（画像提供・長浜市）



神輿巡行のために盛られた「石積み」。石垣左側の盛石がそれである（画像提供・長浜市）

れば奇異な感じに映るが、古来一日の始まりは日没からであったことから考えれば、日没から元旦であり、ここにも菅浦の古くから続く慣わしが見受けられる。

菅浦のトシノミは稲穂を数本束にした打ち綱に、浜で拾った小指の先ほどの平たい石をくくりつけたもので、持ち帰り神棚に供えたあと、軒下などにつるして稲穂に残した粃米を鳥に分け与えるという。このトシノミは、神主組が一人一五〇膳計三〇〇本を手作りする。できあがったトシノミは、神主組が琵琶湖で水垢離を行ったのち大晦日に神社に奉納し奉納儀礼の後、参拝の人々に配られる。岩佐氏は昨年この役をされたということであった。

稲穂にくるむのはよく見受ける「モチ」でなく、小さな「平石」で、ここでも琵琶湖の水で常に洗われ浄化されたものが用いられている。そもそもなぜ小石なのか、民俗学者井上頼壽氏（いのうえよりひさ）は菅浦の「トシノミ」について「トシノミとは、稲の根元に小石を付けたもので、石は土の表徴である。即稲草が土に生えている形を現

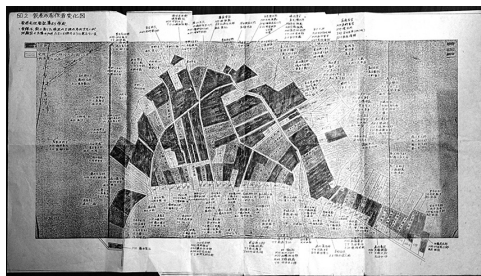


「年越祭」で配られる「トシノミ」。手に持っているのがそれである（画像提供・長浜市）

したものである。〔『続近江祭礼風土記（農耕儀礼「トシノミ」）』との見解を示されている。「土の表徴」とは農地の少ない菖浦であればこそかもしれないが、少しは琵琶湖と結び付けてみたい。古来、菖浦の人々は漁師として船を操り船とともに生きてきた。琵琶湖の漁師は小石を舟霊の依代とみて大切に扱ってきたという。その舟霊信仰との関わりが小石を包み奉納する形となったのではないだろうか。いずれにしろ、琵琶湖を中心に水、土、稲、鳥など人々を包む自然との関わりが、年中行事の形として取り込まれているといえる。

家がえ（家移り）

住まいについて、下世話ではあるが山の手というほうが高級感があるように聞こえる。菖浦では逆に、地価は琵琶湖に面した「浜出」のほうが高く、山側の「北出」が低いとされてきた。琵琶湖の影響をまともに受ける浜出は、財力がないと石垣などの整備ができない。また船着き場、飲み水をはじめとする水利用などから浜出のほうが上位になっ



「家がえ」を記録した図面。1軒で4～5人の入れ替わりがある（阿弥陀寺所蔵）

ていた。そのため浜出の家で生活が難しい家がでると、財力を蓄えた北出の家と「家がえ（家移り）」を行っていた。石垣をはじめとする水との関係、浜の重要性は家を越えて共同体として最優先であったことが、家がえ制度に発展させたのではないだろうか。阿弥陀寺が所蔵されている集落の地図を見ると、同じ家屋に幾度も名が書き加えられて家がえの頻度がよくわかる。

村の要、惣寺としての阿弥陀寺

菖浦の祭・宗教行事を語るのに須賀神社があげられるが、寺としては阿弥陀寺を除くことができない。一つの村としての菖浦だが、「西村」・「東村」の二つの「惣庄」として菖浦を形成してきた。現在は真蔵院、安相寺、祇樹院を合わせて四寺しか残っていないが、かつては土地柄広い堂を持っていないことから、村内には支度僧による氏寺を含め十二カ寺もの小さな寺があったという。その十二カ寺の中で、「惣寺」の「浄光山等覚院阿弥陀寺（一三五三年託何上人により開基）」は「道場」として村のかなめの役割を担ってきた。



「惣寺の阿弥陀寺」。時宗。ながらく村の寄合の場所でもあった

明治の学制までは寺子屋の役割を果たし、「惣の寄り合い場」としては昭和五十二年（一九七七）に建設された菅浦公民館にその役割を移すまで続いてきた。阿弥陀寺には惣の記録「阿弥陀寺古文書」が永らく保管されてきた。「開けずの箱」に保存されていた古文書五八冊と古絵図一幅で、国の重要文化財に指定されている。秋山住職によると、明治時代に合祀された須賀神社の格上げ嘆願に関わり淳仁天皇関係文書として持ち出され、昭和二六六ころ菅浦に戻されたという。現在は滋賀大学に寄託されている。

あとがき

成安造形大学附属近江学研究所発行『文化誌近江学』第一〇号に「菅浦 湖と生きる村を訪ねて」と題して書いたのだが、紙面の都合から一部項目や文章の割愛をせざるを得なかった。聞き取り調査をさせていただいた方々の話は多岐にわたり、村に生きる誇りと多くの方に村の歴史や生活を知っていただきたいという思いが強く感じられた。筆者としても少しでも省いた内容が追加できないかとの思いから、ここに改めて推敲し構成や言葉足らずになっている箇所を補足し書き直してみた。

本文中には載せなかったが、船でしか行けなかった陸の孤島ととらえていた菅浦であるが、聞き取りを行っているなかで、昔から山の道があったことが判った。集落の北の尾根を越えて

大浦までの道があったそうである。年配の藤井氏は山の道を通り小学校に通っていたということであった。調査が十分でなかった船路、陸路といった「ミチ（路）」をとらえてあらためて菅浦を探ってみたくなった。

最後にご協力いただいた菅浦郷土史料館の藤井泉三氏、阿弥陀寺住職秋山富男氏、割烹旅館佐吉の岩佐達己氏に紙面を借りてお礼を申し上げる。

参考

菅浦…滋賀県長浜市西浅井町菅浦 交通手段 J R湖西線水原駅より近江鉄道バス

淳仁天皇…天平宝字八年（七六四）藤原仲麻呂の乱で廢帝となり、淡路に流され翌年の天平神護元年（七六五）にその地で亡くなったと『続日本紀』に記す。菅浦では、淡路は淡海の間違いで、須賀神社の船形古墳が淳仁天皇の御陵と伝わる。

阿弥陀寺…木造本尊阿弥陀如来立像は鎌倉時代文暦二年（一二三三）の作、快慶の弟子行快の銘がある。秘仏。重要文化財。聖観音坐像、阿弥陀如来坐像いずれも平安時代後期の作、長浜市指定文化財。

ヤンマー家庭工場…創業者山岡孫吉氏により、滋賀県北部に数多くの農村工場が設置された。作業所は個人の敷地に建てられ、主婦層を中心に部品粗加工を行い副収入と生活改善に影響を与えた。昭和時代の菅浦を支え現在も十戸ほど稼働している。（岩佐氏談）

近江輿地志略…享保十九（一七三四）膳所藩士寒川辰清による近江の地誌をまとめた書籍、全一〇一巻一〇〇冊、近江学の出発点となる地誌。

参考文献

- ・滋賀県長浜市教育委員会 『菅浦の湖岸集落景観保存活用報告書』
二〇一四年
- ・滋賀県琵琶湖環境部 『琵琶湖ハンドブック改訂版』 二〇二二年
- ・滋賀県 『琵琶湖と暮らし』二〇一五指標でみる過去と現在』 二〇一五年
- ・柳田國男 『食物と心臓』 講談社 一九七七年
- ・富山和子 『水の文化史』 文芸春秋 一九九〇年
- ・寒川辰清編 小島捨市校注 『近江輿地志略』 歴史図書 一九六八年
- ・橋本鉄男 『日本の民俗 滋賀』 第一法規出版 一九七二年
- ・井上頼壽 『続 近江祭礼風土記（農耕儀礼）』 滋賀県神社庁 一九七三年
- ・畑中誠治他 『滋賀県の歴史』 山川出版 一九九七年

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第7号

発行日 平成30年3月26日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 西久松吉雄

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2018

ISSN 2186-6937